古代アメリカ学会会報

第 24 号

ブラジル・シングー川上流域・チュコンの村

目次

◆会員からの投稿
◆第 13 回大会アナウンスと発表者募集
◆『古代アメリカ』の原稿募集
◆役員会報告
◆新入会員
◆事務局からのお知らせ

2008 年 7 月

＊本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

遺跡公園が見せる生き様：チチェン・イツァにおける遺跡ガイドツアー追っかけ調査を通して

杓谷茂樹（中部大学 准教授）

遺跡公園としてのチチェン・イツァ

本学会会員諸氏であれば、チチェン・イツァという「マヤ文明」を代表する遺跡は当然ご存知だろう。19 世紀半ば以降、世界中に知られるようになったこの遺跡は、その後、現在までに積み上げられてきた国際的な知名度とそのイメージから、「マヤ文明」に関する一般の興味や関心の中で、常にその中心的な存在でありつづけてきた。現在、我々が見ることのできる遺跡の姿は、20 世紀前半にアメリカのカーネギー研究所によって行われた調査・修復によってほぼ決まったが、1988 年にユネスコの世界遺産に登録されてから、新たな形でその姿を変貌させてきた。

チチェン・イツァは観光客にとっては見どころの多い遺跡公園である。「いけにえの泉」とも呼ばれるセノーテをはじめとして、遠くメキシコ中央高原のトゥーラとの関連で語られる戦士の神殿、儀礼としての球戯の場であったマヤ最大の大球戯場、ククルカンのピラミッドとも呼ばれるエル・カスティージョ、そして古代の天文台の跡とされるカラコルなど、個々の建造物がそれぞれ強烈な物語性、あるいは高度な科学的知識を彷彿とさせる個性を持って、空間を分け合っている。

そんなチチェン・イツァ遺跡公園の展示のあり方を実際に決定し、管理、運営を行っているのは、国立人類学歴史学研究所のユカタン支部とユカタン州文化観光サービス協会（CULTUR）という州政府の関連組織である。これらのおかげで、ここでは公園内の整備が極めて行き届いている。かつてこの地は全体が木で覆われていたが、現在では新チチェンと旧チチェンというふたつの区域の主要な石造建築物群の周囲の木々の多くは切り払われ、芝生が広がっている。また、1990 年代前半頃より主要建造物へのアクセスが徐々に制限されるようになり、2006 年にはついにエル・カスティージョにも観光客が上に登ることが禁止された。こうして遺跡の風景は意図的に作り出されているのである。

ここにやってくる観光客が遺跡に何を求めているのかといえば、その強烈な個性の部分、すなわち、建造物の大きさや美しさ、そして遺跡にまつわる物語などだろう。こうしたイメージはガイドブックやパンフレットのみならず、テレビやインターネットなど様々なメディアを通して一般に広く流布されていることなので、大半の観光客は事前に何らかのイメージを獲得しているはずだ。彼らは実際にここを訪れることでこのイメージを確認しようとしているのである。風景が意図的に作り出されることによって、遺跡の石像建造物は、最も美しい姿で観光客の目に触れることになるわけだが、それは観光客が期待するものをより良い形で提供する行為といえる。つまり、この遺跡公園は観光客が遺跡について事前に獲得し、また期待するマヤ・イメージに対応するように、その形を変化させてきたものなのだ。

遺跡ガイドツアーの追っかけ調査

それでは、そんなチチェン・イツァ遺跡公園で行われているガイドツアーでは、観光客に遺跡の何を見せようとしているのだろうか。筆者は 2002 年以降、毎年カンクン・リヴィエラ・マヤ観光圏における観光人類学調査を実施しているが、その一環としてチチェン・イツァ遺跡公園で 20 回以上にわたってガイドツアーの調査を実施してきた。その際、基本的には、任意に選んだひとつのツアーにできるだけ気づかれないようにして後について行き、そのルート設定とその時間配分、および説明の内容を確認するという方法をとった。この際、周囲の他のガイドの説明などにも注意を払った。これを称して筆者は追っかけ調査と呼んでいる。

チチェン・イツァ遺跡公園では、カンクンなどからガイド付きのツアーに参加するか、遺跡公園の入り口でガイドを雇うかしてガイドツアーに参加して公園内をまわる観光客が圧倒的に多い。ここでは広い敷地内を自由に歩き回れるようになっているが、ガイドツアーがたどるルートについても特に決まりはなく、案内するガイドの裁量に任されている。それでも、短時間で効率よく回る必要があるため、いくつかのパターンはあっても、極端に他と違うルート取りをすることはまずないといっていい。

こうしたガイドツアーに共通して見いだすことができた特徴は、建造物が最も美しく見えるポイントを必ずといっていいほど押さえているということである（写真１）。建造物の解説はそこで行われ、多くの場合、その建造物へのアプローチについては、その後の観光客個人の判断に任されるのである。実は、このポイントこそ観光客が既に目にしたことのある写真のイメージと同じ景色が見られる

写真 1　エル・カスティージョと戦士の神殿が並んで見えるこの場所で、多くのツアーが立ち止まる　©杓谷茂樹

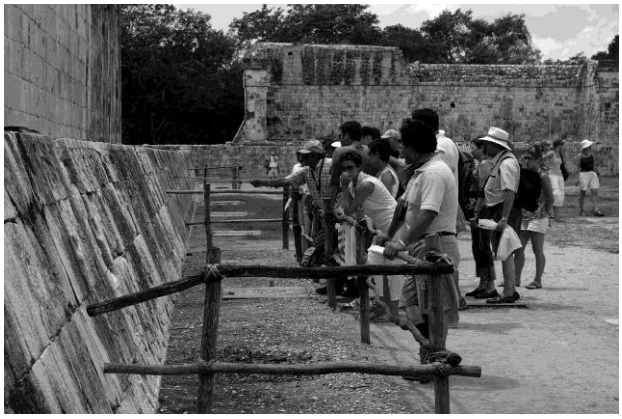

写真 2　大球戯場のレリーフを説明するガイド　©杓谷茂樹

写真 3　エル・カスティージョ北側で音響効果の提示をするガイド　©杓谷茂樹

場所なのだ。

その一方で、観光客があまり興味を示さないものは、意図的にツアーのルートからはずされることになる。例えば、戦士の神殿がそれである。これはチチェン・イツァを代表する建造物のひとつであり、その写真イメージはガイドブックには必ず載っているものだ。この建造物には階段上にチャックモールと呼ばれるいけにえに捧げる心臓をのせるための石像があることで非常に有名なのであるが、階段を上ることが禁止されて以降、この建造物の前まで行くガイドツアーは少ない。それは階段の下からはチャックモールが見えないためで、多くのガイドはわざわざ近づくことをせず、チャックモールの存在が確認できる少し離れた木陰でこの建造物の解説を済ませてしまうのである。

このようなガイドツアーにおいては、ガイドが行う説明も興味深い。まずほとんどのツアーで必ず説明される項目がある。それは、春分と秋分にエル・カスティージョで起こる現象について、エル・カスティージョの階段の合計が365段だということ、カラコルが天文台だったこと（暦が発達し、科学が進んでいたという話）、球戯のルール、チャックモールについて（いけにえに関係する話）などである（写真 2）。これらの説明は考古学の専門書にも書かれているようなことではあるが、その中でも特徴的で、観光客にインパクトを与えうるような事柄がピックアップされたものといえる。言い換えれば観光ガイドブックに書かれていることといってもいいだろう。

しかし、ガイドツアーでは観光ガイドブックに書かれていない事柄も説明の中に入ってくることがある。例えば球戯場やエル・カスティージョ北側での音響効果の提示（手をたたく、大声を出すなど）がそれにあたるだろう。これは、客の興味を引きつけ、ツアーのグループをまとめるという機能を果たしているようである（写真 3）。なお、エル・カスティージョ北側での音響効果の説明に際して、あるイタリア語ガイドが「パバロッティがそこで歌った」という説明をしていたこともあった（実際チチェン・イツァ遺跡公園では、かの三大テノールがそろってコンサートをしたことがある）。

ただし、中には考古学的には全く正しくない内容が語られることもしばしばある。例えば「古代の球戯と同じものはシカレに行けば見ることができる」というものがあったが、実際、リヴィエラ・マヤのシカレにあるテーマパークでショーとして見せられている球戯は、どう見ても古代に行われていたものとは違う。また、ある女性日本語ガイドの説明に「チャックモールは人間をいけにえにして、その心臓をのせるもの。これは太陽の神に捧げたものである。いけにえにはハンサムな男性が選ばれたという。それ故に太陽の神様は女性だったという説もある」と、マヤ考古学を学んできた筆者が初めて聞くような学説が出てきたこともあった。

マヤ考古学に通じた者ならともかく、それを聞いた一般の観光客は、ほとんどの場合そういった説明を事実として受け止めることになるだろう。このことをツアーガイドの質の低下として片づけてしまえばそれまでだが、こういった説明をあえて肯定的に見るならば、ガイドと客とのやりとりの中で、とっさに新しい言説が作り上げられる過程として考えてもいいだろう。

遺跡が現在を生き抜いている姿

既に述べたように、チチェン・イツァ遺跡公園では、観光客が遺跡について事前に獲得し、また期待するマヤ・イメージに対応するように、遺跡独自の見せ方が示されている。そこでは観光客にありのままを見せるのではなく、観光客が遺跡に求める要素を強調、あるいは追加して提示する。それは、観光客に見せるもの、そしてその見せ方が意図的に操作されているということだ。

遺跡ガイドツアーの中にも見て取れるような、観光の持つパワーと考古学による説明との間のせめぎ合いによって遺跡公園という場に表象される「マヤ文明」のイメージについて考えたとき、我々は、それこそ遺跡が現在を生き抜いている姿に他ならないということに気づくだろう。

遺跡というのは過去のものではなく、昔の人の活動の痕跡が、いったん忘れ去られた後に再発見されて、そこに意味づけされたものである。昔の人の活動など実際には誰も見たことはないのだから、現代人の遺跡への意味づけは比較的自由に行われることになる。そうした遺跡の意味づけという行為の中では、考古学による説明でさえ、たとえば神話上の巨人や宇宙人などが出てくるような様々な説明と同列に置かれているにすぎない。ただ、「科学的」な理論と手続きをとることにより、考古学による説明は一般に正しいこととして扱われるだけなのだ。だから、観光化された遺跡公園においては、我々が目の当たりにするのは、正しいはずの考古学的な説明とは必ずしも軌を一にしない状況であったりするのだ。現在を生きる遺跡だからこそ、何度訪れても、そのつど違う顔を見せてくれて楽しいと思うのは筆者だけだろうか。

エクアドル南高地・コヒタンボ遺跡とその周辺

森下壽典（早稲田大学大学院　博士後期課程）

南米エクアドル共和国南部に位置し、同国第三の都市であるクエンカは、周知の通り、かつてインカ国家北方領域における最大の拠点、トメバンバであった。クスコとは異なり、トメバンバ時代の遺構は、遺跡公園として整備されたプマプンゴと呼ばれる地区を除いてほとんど残っていないが、周辺地域に眼を転じると、トメバンバから延びるインカ道沿いに、観光地としても著名なインガピルカ遺跡をはじめとして、いくつもの遺跡が残されている。そのなかの一つに、本稿で紹介するコヒタンボ遺跡がある。

コヒタンボ遺跡は、クエンカから北東に約 20km、カニャル県の県都アソーゲスの西方に位置する同名の丘（標高 3076m）の頂上付近に位置する。この丘は、クエンカからも遠望することができ、また特徴的な形状を呈しており、とくに北方からは、横たわるピューマの姿に見えると言われている。丘上ではインカ以前より周辺で有力な民族集団であったカニャリの土器が多く出土するほか、ウシヌ（インカ国家の拠点的遺跡に多く認められる基壇遺構）を含め、いくつかのインカ期の建造物遺構が残存しており、数年前に、エクアドル文化庁（当時）のアントニオ・カリーリョ氏によって、その復元・整備が行われた（写真 1）。

一方、すでに先行研究によって明らかにされているように（大平秀一 1994「エクアドル南高地の Sañoc Camayoc―アソーゲス周辺域における土器職人の存在をめぐって―」『早稲田大学文学研究科紀要 哲学・史学編』 第 20 輯、117-132 頁参照）、コヒタンボは、16 世紀後半の文書 *Relaciones geográficas de Indias* にも、土器製作地、石切場として記載されている。実際に、ハビエル・ロヨラ村など、丘周辺には石工が盛んに行われた地区があり、インカ期にまで遡る可能性のある石の切り出し痕や、儀礼的

写真 1　コヒタンボ遺跡（手前に見えるのが修復途上のウシヌ）

©森下壽典

意味を持って加工されたと考えられる、いわゆる「切られた岩」が点在することを確認している。さらに、1990 年代には、オーストラリアの考古学者ケン・フェファーナンによって、インカ期における土器生産拠点が同定・調査された。しかし、残念ながら、概報が文化庁に提出されたのみで、正式な報告書は作成されていない。

筆者は、これまでも同遺跡周辺を訪ねたことがあったが、とくに最近、インカ国家における土器の生産体制について興味を持っており、フェファーナンによる調査地点や現在の土器製作の状況等を確認したいという思いもあって、昨年、コヒタンボ、とくに、フェファーナンによる主要な調査地点であり、現在でも伝統的とされる技法で土器製作が行われているというサン・ミゲル・デ・ポロトス村周辺を訪れた。わずか一日、足を運んだのみで、調査といえる性質ものではなく、また残念ながら、発掘調査地点そのものは、情報・時間の不足で再確認することができなかったが、以下、得られた情報について簡潔に報告したい。

すでに雨期の兆候が見られ、ときに強く雨が降る 2007 年 9 月某日、早朝にクエンカを出発し、コヒタンボの丘南方で、舗装された道からサン・ミゲル・デ・ポロトス村に至る山道に入る。幸いにして十分に車で通行可能な道が続き、丘陵地帯を登ること 20 分ほどで同村に到着することができた。19 世紀中頃に建てられたと言われる教会が存在する広場で、いろいろと情報を集めていると、雨宿りをしている婦人と子供に、車に同乗させてくれるように頼まれた。話を詳しく聞いてみると、さらに丘陵を上ったところにある、ハトゥンパンバという土器作りを行っている集落に帰る途中であり、さらに偶然にも、その母親が、土器作りをしているということであった。さっそく、サン・ミゲル村の中心部よりさらに南東、標高約 2800～2900m に位置するハトゥンパンバまで案内してもらう。

そこで会うことのできた齢 90 を超えようかという老婆は、高齢のため、残念ながらすでに土器作りを行っていないということで、土器製作の一連のプロセスについて十分に観察することはできなかった。しかし、とくに成形技法について確認すると、ワフターナと呼ばれるキノコ状の土製具によって（写真 2）、器壁の内外面から粘土を叩き伸ばすことで成形を行っていたという。いわゆるタタキ技法である。検証が必要だが、同様の技法は、エクアドル南部高地において比較的広く認められるようであり、またカニャリの土器製作技術が受け継がれたものだとの指摘がある。

すでに土器作りをする家は数少なく、他に訪ねた家も、土器の作り手が留守であったなどの事情で、十分な情報は得られなかった。しかたなく、古い石壁や土器片の散布地などをキーワードに考古学的な遺構について情報を集めてみると、そういったものは知らないが、ハトゥンパンバから 1km ほど先に、ママワカと呼ばれている巨大な岩があるとの話を聞いた。指し示された場所をみると、背後に聳える山稜から続く緩やかな斜面に、たしかに巨大な岩を望むことができた。

実際に近づいて観察してみると、高さ 6、7m はあろうかという巨大な岩で、いくつかの巨大な破片に割れており、観察する方向によっては、中央部で縦に 2 つに割れたような外観をみせる（写真 3）。また、この岩がある場所の一

写真 2　土器成形道具　　©森下壽典

写真 3　ママワカ　　©森下壽典

写真 4　インカ期に遡る可能性のある遺構　　©森下壽典

部は、人為的にテラス化されていると判断される。このような状況から判断して、インカ期においても、地域における主要な「ワカ」（崇拝・儀礼の対象となっていた場所・モノ）の一つとして認識されていた蓋然性が極めて高い。

さらに、周囲を歩いてみると、背後の山々を模すように手が加えられていると思われる岩のほか、土留めの石壁を伴う人為的なテラスと、そこにつくられた水溜状の遺構を2カ所、見つけることができた（写真4）。草が覆い茂り、表面からの観察では遺構の詳細な観察を行うことができず、またこの遺構と関連する水路の存在や、遺物の散布状況も確認できなかった。したがって、断定することはできないが、岩のワカの主要な意味として水源と関わるものが挙げられること、また、近傍で、コンクリート製の貯水槽とホースを利用した簡便なものだが、水道の整備が行われており、現代でも周辺が水の流路として利用されていることを重ねて考えれば、インカ国家の時代において、背後の山々を水源とし、水をめぐる施設が構築されていたとしても不自然ではない。

このように、一地域をわずかな時間、訪れただけでも、興味深い知見をいくつか得ることができた。ハトゥンパンバ、ママワカといった地名がケチュア語であることは言うまでもないが、住民にも、「インガ」、「～ピルカ」といったケチュア語系の姓をもつ人々が多いようで、コヒタンボ遺跡、またサン・ミゲル・デ・ポロトスをはじめとするその周辺域には、インカ期の様々なコンテクストが、よく残存している可能性が高い。筆者の興味はまず土器製作地にあったわけだが、周辺域を含めた、総合的な調査が必要であることがあらためて確認されたと言えよう。本年度も、同地域でより本格的に情報収集を行う予定である。

第13回大会のアナウンスと発表者募集

2008度古代アメリカ学会（総会・研究大会）は、**2008年12月6日（土）早稲田大学・戸山キャンパス　36号館6階681教室**において開催することに決定いたしました。今年度の研究大会は、昨年同様、研究発表、調査速報、ポスターセッションを予定いたしております。発表時間、内容は、以下の通りです。なお、発表時間には、質疑応答の時間も含まれておりますので、ご注意ください。

研究発表：30分間
調査速報：20分間（2008年度に行った調査の報告）
ポスターセッション：研究大会会場の外でA0(841×1189mm)版のポスター1枚を用いて行う。

発表希望者は、研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれを希望するかを記し、題名と要旨（400字程度）を事務局までe-mail、またはFAXでお送りください。締め切りは、2008年10月1日(月)です。なお当日の発表時間は、発表者数により変更になることがございます。ご了承ください。

『古代アメリカ』の原稿募集

会誌『古代アメリカ』第11号（2008年12月発行予定）に掲載する原稿を募集します。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定、執筆細目をよくお読みください。論文原稿は、随時募集し、査読を終えたものから（原稿受領後1～2ヵ月で査読終了予定）順次掲載する予定です。

投稿希望者は、編集委員会宛（下記佐藤宛）にメールまたは郵便にてご連絡ください。編集委員会より、「投稿カード」を配布致しますので、これを提出原稿に添付してください。

なお、原稿掲載の可否は、規定による査読結果を踏まえて、編集委員会が決定します。

＊投稿に関する連絡先：
佐藤悦夫
〒930-1292　富山市東黒牧65－1
富山国際大学国際教養学部
Tel：[redacted]、Fax：[redacted]
E-mail：[redacted]

役員会報告

2008 年 6 月 28 日に、2008 年役員選挙の開票を実施した。総投票数は 50 票で、選出結果は次の通りである。

・会長（有効投票数 50 票、うち白票 0 票）
当選人：大貫良夫

・代表幹事（有効投票数 50 票、うち白票 0 票）
当選人：関 雄二

・監査委員（有効投票数 100 票、うち白票 5 票）
当選人：鶴見英成、坂井正人

古代アメリカ学会選挙管理委員会委員長
馬瀬智光

新入会員

2008 年 1 月 11 日から 2008 年 6 月 20 日までの役員会（メールを含む）で以下の方々の入会が承認されました。会員数は現在 177 名となっております。

・[redacted]

・[redacted]
・[redacted]
・[redacted]
・[redacted]

事務局からのお知らせ

1．会費納入のお願い

2008 年度までの会費が未納となっている方は、同封いたしました振込用紙でお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、2006 年度以前にさかのぼり、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

2．会報への投稿募集

『会報』第 25 号への原稿を募集します。研究随想、研究ノート、フィールドワーク便りなどテーマは自由で、字数は 2000～3000 字程度です。締め切りは、5 月末日と 11 月末日の年 2 回となります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

3．会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2000円で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ学会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

4．以下の会員の方々の転居先、及びメールアドレスが不明となっております。連絡先をご存じの方は、事務局(jssaa@sa.rwx.jp)までお知らせ下さい。

[redacted]

5．会報 23 号の訂正とお詫び

会報 23 号 13 頁「次回研究大会について」の記述に誤りがございました。「第 13 回研究大会は、2008 年 12 月 2 日に、早稲田大学で開催する予定です。」とありますが、正しい開催日は、本会報でご案内いたしましたように、2008 年 12 月 6 日です。この誤記に関しては、すでにホームページ上で訂正させていただきましたが、周知徹底のため、改めてお知らせいたします。重要な報告に誤記がありましたことを深くお詫び申し上げます。

6．下記のように、本学会が主催の一部となっている国際ワークショップ・公開シンポジウムが開催されますので、ご案内いたします。

日本アンデス考古学調査 50 周年記念国際ワークショップ

センターと社会プロセス

―アンデス文明「古期」・「形成期」研究における概念 vs. 脈絡―

“Centro” y Procesos Sociales

―Concepto vs. Contexto en los Estudios sobre la Civilización Andina para los Períodos Arcaico y Formativo―

日時：2008 年 11 月 28 日（金）、29 日(土)、30 日（日）
場所：国立民族学博物館　第 4 セミナー室
発表者：Peter Kaulicke (Pontificia Universidad Católica del Perú)、Ruth Shady (Universidad Nacional Mayor de San Marcos)、John Rick (Stanford University)、Richard Burger（Yale University）、　大貫良夫（東京大学名誉教授）、加藤泰建（埼玉大学副学長）、関雄二（国立民族学博物館教授）、井口欣也（埼玉大学准教授）、坂井正人（山形大学准教授）、鶴見英成（埼玉大学非常勤講師）、芝田幸一郎（法政大学非常勤講師）
主催：国立民族学博物館、ペルー国立サン・マルコス大学、埼玉大学、古代アメリカ学会、アンデス考古学調査 50 周年記念事業実行委員会
言語：スペイン語（通訳無、入場無料）

日本アンデス考古学調査 50 周年記念公開シンポジウム

「古代アンデス文明―過去との対話―」

日時：2008 年 12 月 13 日(土)　14:00～17:30
場所：読売ホール
プログラム
　第１部　歴史と展望　「アンデス調査５０年」(仮題)（大貫良夫　東京大学名誉教授）
　　「クントゥル・ワシ」(仮題)（加藤泰建　埼玉大学副学長）
　　「パコパンパ」(仮題)（関雄二　国立民族学博物館教授）
　第２部：座談　「文明との対話」(仮題)
司　会：加藤泰建、パネラー：大貫良夫、関雄二、青柳正規（国立西洋美術館長）、楠田枝里子(司会業・エッセイスト)
主　催：国立民族学博物館、埼玉大学、読売新聞社、古代アメリカ学会、アンデス考古学調査 50 周年記念事業実行委員会（入場無料）
連絡先：国立民族学博物館 [redacted]
　　〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園 10-1　TEL＆FAX [redacted]
　　e-mail [redacted]

＜編集後記＞

掲載いたしましたように、2008 年 12 月に早稲田大学で開催される第 13 回古代アメリカ学会総会・研究大会の詳細が決定いたしました。奮ってご参加ください。

地球温暖化対策をめぐる G8 サミットは、やはり大きな成果を挙げることはできませんでした。人間と自然の共生意識が高まり、森林が維持されることを願って、今から約 20 年前に撮影した、ブラジル先住民の村の写真を表紙に用いました。

2008 年 7 月　大平秀一

＜表紙写真提供：大平秀一＞

発行　古代アメリカ学会
発行日　2008 年 7 月 25 日
編集　大平秀一
　　山本　睦
古代アメリカ学会事務局
　〒565－8511 大阪府吹田市千里万博公園 10－1
　国立民族学博物館 [redacted]
電話：[redacted]
Fax：[redacted]
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180－1－358812
ホームページ URL　http://jssaa.rwx.jp/